

光陵だより

「むめさむ」

校長 佐藤 文 哉

昭和48年12月24日発行

第11号

発行所 光陵高校PTA
編集者 広 野 孝 貞 弘
印刷所 たまメタイプ印刷

突然光陵高校へということは何から何まで整理のつかさいます。九月一日に赴任してまいりました。以来三か月、スコースターターである私にも学校やそれを取り巻くいろいろのことが少しずつわかってきましたので、一言、二言感ずるところを述べていただきます。

まず、千名に近いご子弟を擁抱することの責任の重大さを身にしみて思い、ひと時もいい加減な気持ちではいられないと自らに言い聞かせています。そして次に、よのご子弟の将来について私なりに思いをめぐらせています。

昔の子どもはよく一寸法師の童話を聞き、「小さなからだに大きな望み」を抱くよう教えられたのですが、今の子どもは、大きなからだをしていても小ささを望みしか持っていない、と言われるようになってきました。これは近代日本の百年史の一面を象徴的に物語るようにもいえます。志は高く大きく、困苦欠乏に耐えて勉勵し立身するというのが戦前の日本人の理想像であつたわけですが、日本も今や先進国の仲間入りをし、いわゆる「豊かき社会」の實現にまで達しつつあるようにみると、日本人は目標や価値観に迷い、意欲を失いかけてきた、と言われます。

豊かき社会では労働時間は減少し余暇が増大し、人々はそれぞれの価値観に従って多様な生き方をするのが可能になります。若者に将来の

希望をきいてみると、自分の趣味にあつた生活を築くのがんびりと通じたい、というのがいちばん多いそうです。なるほど「大きなからだに小さな望み」で、それはわれわれにはうらやましくもあり、けっこうなことでしょう。しかし、よく考えてみますと、多くの人は、教しく働くことから解放され、なかには定期的な勤務がなくてもよい、あるいは全く勤務がなくてもよい人もふえることになりましょうが、いっばい、ある人々は、この高度に発達した複雑な社会を維持し発展させるために、さらに熱く働くかきければならなくなるでしょう。

現代社会に必要な知識、情報の量は十年間で二倍か三倍になるといわれます。それらを吸収し選択し、それに基づいて整理したり創造したり決断したりすることがますます困難になってきますが、こういう仕事をやる人々がどうしても社会にいななければならない、かれらはそれに耐えるだけの能力とモラルを持たなければならない。ある学者はこういう社会を知識(情報)社会とよび、こういう人々をスペシャリストとよびますが、ご子弟の将来は、趣味に生かせることでしょうか、それともスペシャリストとして生きることでしょうか。私には、いろいろな点から考えて、光陵高校の生徒はどうもスペシャリストとして運命づけられているように思われます。

スペシャリストとして、医師、弁護士、教育者、技術者、企業管理若等々があげられますが、それぞれ専門の分野に深く通じているだけでなく、幅広い意見をもち、自分の専門と他との関係を見過しなから自分の専門をさらに深め絶えず新しくしていく者だとされています。

世間で「知育偏重」という言葉がはやり、現在の教育を批判していますが、知育が、教養を豊かにし、思考力を養い、想像力を伸ばしていくようなものであるならば、それは、徳育や体育とともにしっかりと厳しく行なってもらいたいものだ、と私は考えます。未来に生き、未来を切り開くスペシャリストの卵たちにとっても、それは是非必要なことだと考えます。